

大学 東京拠点のいま



MEMBER

杉本 仁嗣

関西大学
東京センター事務長（2023年3月現在）

木村 勝

学校法人関西学院
東京丸の内キャンパス課長

古谷 銀次郎

甲南大学ネットワークキャンパス東京
事務所所長（2023年3月現在）

鈴木 真木子

松山大学
東京オフィス長

江津 英昭

司会

明治大学経営企画部広報課長、
広報・情報委員会大学時報分科会委員
（いずれも2023年3月現在）コロナ禍により東京拠点は
どのように変化したか

江津 2000年代以降、主に関西エリアの大学を中心に東京中心部にサテライトキャンパスやオフィス拠点を構える動向が見られました。いわゆる首都圏進出の一環として長年、教育研究活動や入試広報、就職活動支援、卒業生交流といった大学機能を担ってきましたが、東京進出から約20年の時の経過、またコロナ禍という世界規模での未曾有の経験を経て、東京に拠点を置く意義やその役割はどのように変化しているのでしょうか。本来、対面交流や立地のメリットを生かしたい拠点運営において、各大学が存在価値を高めるため、新たな活用を試み、オフィス機能の強化を図っていますが、今回の座談会では、時代や社会環境変化に対応する「大学 東京拠点のいま」について情報共有し、今後を展望する機会としたいと思います。最初に関西大学東京センター事務長の杉本様から現状についてお話しいただきました。ありがとうございます。

利用する在学生は減少 活用方法を広げる

杉本 私はちょうどコロナ禍が始まった頃の3年前に東京に赴任しました。コロナ禍前は、東京駅隣接のサピアタワー内にある本学の東京センターには、就職活動に励む学生が毎日50人近く来館し、着替えをしたり、仮眠を取ったり、面接の練習をしたりしていましたが、コロナ禍となり、説明会や面接など企業の採用活動はリモートが中心となったために、学生たちでにぎわう風景はここ3年ほど見られなくなりました。しかしながら同窓会のネットワーク拠点としてのイベントや、高校の先生を対象にした教育フォーラム、一般社会人を対象とした公開講座の開催など、さまざまなステークホルダーに向けて取り組みを行っています。

木村 関西学院の東京オフィスは2003年に開設され、その後、2007年にサピアタワーにある東京丸の内キャンパスが創設されました。東京丸の内キャンパスのミッションは、東京における学院のプレゼンスを向上させることとなっています。具体的には次の5つの役割を果たして

います。1. 教員の研究活動および学生の首都圏における就職活動の拠点。2. 丸の内講座をはじめとした学習機会を社会に広く提供すること。3. 本学の広報。分かりやすく言うところ「関西学院」を「かんせいがかいん」と正しく読んでもらえるようにすること。4. 産官学連携の推進。5. 卒業生全体の約10%に及ぶ首都圏在住の卒業生との連携。以上を5つの柱として運営しています。

古谷 私は5年前に甲南大学ネットワークキャンパス東京事務所に着任しました。本学の東京事務所は非常に歴史が古く、旧制甲南高等学校の卒業生が、1928年に東京で開催した第一回の会合がルーツとなっています。それ以降、同窓会が活発に活動しており、現在では東京の会員が約6千名となり、年間を通してさまざまなイベントを開催しています。その同窓会が先に東京に事務所を構えていたのですが、1978年に学園が創立60周年を迎えたのを機に、学園としても東京に事務所を置くことになりました。その後、事務所はサピアタワーに移転し、甲南大学ネットワークキャンパス東京として活動しています。本キャンパスでは、現在、学生の就職活動の支援、教職員学会や研究会の拠点、公開講座など生涯教育の機会提

供、東京の同窓会活動の拠点、企業や官公庁の情報収集・情報連携の拠点という5つの役割を担っています。

鈴木 松山大学の東京オフィスは2007年10月に、松山大学三恩人の一人「学園創設の父」である新田長次郎翁が創業した、銀座にあるニッタ株式会社の東京支店のビルの一室に開設されました。私は2年前にオフィス長に着任しました。以前は3名体制でしたが、コロナ禍で学生の訪問が少なくなつたため、現在は私を含めて2名体制で運営しています。第一の目的は学生の就職支援です。また、それに関連して卒業生と学生をつなげる役割も果たしています。コロナ禍で情報収集・情報発信の機会は減ってしまいましたが、愛媛県や松山市の東京事務所と協力して行っています。学生支援はオンラインが主になりましたが、代わりに在京する卒業生の方々が何か協力できることはないかと心配して訪ねてくれます。そうした応援に非常に勇気づけられています。

コロナ禍を経て

対面イベントの活性化へ

江津 少しお話にも出ましたが、コロナ禍の前後でどのよ



うな変化があったのか、またコロナ禍を受けてどのような取り組みを行ってきたのか教えていただけますか。

杉本 コロナ禍の最中は、東京での就職支援活動はかなり制限されましたが、この1年はコロナ禍も少し落ち着いてきたので新たな取り組みを実施しました。それが、東京の第一線の企業で活躍している卒業生たちとこれから就職活動を始める学生の交流会です。対面のみで開催、しかも自費だったため、東京まで参加しに来る学生がどれだけいるか不安でしたが、募集を開始した翌朝には定員を超える60名の学生から申し込みがありました。20名以上の卒業生に協力していただき、全体の質疑応答を行った後、ブースに分かれ、先輩に学生が話を聞きに行くという形式を取りました。学生は実に熱心で、一日中先輩と対話し、メモを取っていました。ニーズの高さを実感し、急ぎよ第2回の交流会も開催しました。これからも東京で活躍する卒業生と接点を持ち、学生の就職支援につながるイベントを実施していきたいと思います。

木村 本学は、1889年の開学時は5人の宣教師とわずか19人の生徒の小さな学校でした。教師と学生との距離が近く、情熱を持って学問を教えていました。そのため、在



杉本 仁嗣氏

学中から学生の皆さんと丁寧に接点を持つことを大学としても重視しています。一人一人に寄り添って、卒業してからも接点を持ち続けていければ、組織のリーダーになった時、後輩の手助けをするなど、必ず大学に恩を返してくれます。それが結果的に学生の就職支援にもつながるのです。私はそうした循環を「三日月フレーム」と呼んでいます。

同窓会や公開講座を開催して卒業生とつながりを持ち続けることがその一助になると考えています。コロナ禍で説明会等のオンライン化が進みましたが、やはり対面で得られる情報とは価値が全く異なると思っています。対面ではなくては得られない情報があるのです。実際に航空会社に勤める卒業生から力になりたいというお話があり、羽田の訓練施設の見学会の後、現役CAも参加して座談会を開催したのですが、30名の定員があつという間に埋まりました。留学先からわざわざ帰ってきて参加した学生もいたのですが、やはり現場を見て直接話を聞くことに価値があると話していました。学生たちの間でも、すでにオンラインではなく対面を重視するフェーズに入っているように思います。東京丸の内キャンパスとしては、そうした対面のイベントを開催する機会を今後も増やしていきたいと思っています。

ハイブリッドのメリットも

大きく実感

古谷 本学の創立者・平生鈇三郎先生の創立理念の一つに、「世界に通用する紳士淑女たれ」という言葉があ

ります。このように当初からグローバルな視点で学校が創立されたため、世界に出る前の第一歩として、東京を経験するための場所としてもネットワークキャンパス東京の存在意義があると考えています。ネットワークキャンパス東京は学生が個別に就職活動で利用することを前提としていますが、多数の学生が参加するイベントも企画しています。70〜80名の参加者を募り、1泊2日で企業訪問や卒業生との懇談会、他大学とのグループワークを行う濃密な企画です。コロナ禍により、そうしたイベントもできなくなりましたが、代わりにオンラインを活用した取り組みに力を入れるようになりました。

以前は就職活動のためにネットワークキャンパス東京を訪れた学生に対して模擬面接などを行っていましたが、その後は神戸に帰ってしまうため継続的な支援がなかなかできませんでした。しかし、オンラインを活用することで学生から模擬面接の内容について相談がくるなど、アフターフォローも可能になりました。そのため、今後もオンラインと対面を融合させた取り組みを続けていきたいと考えています。

コロナ禍前は同窓会主催で、東京で活躍している卒業生を迎えてビジネスリーダー講演会を対面で開催してい



鈴木 真木子氏

たのですが、2023年度はハイブリッドでの開催を計画しています。以前は参加者が同窓会のメンバーに限られていましたが、ハイブリッドであれば神戸のキャンパスの学生ともコンテンツを共有できます。コロナ禍で苦労はしましたが、得られたものは大きかったと思っています。

鈴木 本学も2023年度からは、オンラインと対面の融合を追求していきます。オンライン化が進んだことで、

東京で活躍する愛媛県出身や所縁の経済界との人脈を生かして、業界オンラインセミナーや、在京の新聞記者に文章を教えるセミナーを開催していただくなど、首都圏で作った人脈を生かしやすい環境になりました。

また、東京に拠点を置く約30の国公立の地方大学が情報交換する東京事務所会という組織に所属しており、そこで大学の垣根を越えて学生同士を交流させる、オンライン就職活動イベントの開催を提案させていただきました。1回目には11大学、2回目には18大学から多くの学生が参加し、有意義なイベントとなりました。コロナ禍により対面交流が制限されていた中で、他大学の学生とディスカッションできる企画は大いに刺激になったようです。今年はさらに多くの大学に声を掛けて、ハイブリッドで開催しますので、新たな実りがあると思っています。

東京の立地を生かした 取り組みをさらに強化

江津 コロナ禍において、東京に拠点を構えているからこそ得られた新たな発見もあるかと思いますが、それを具

体的にどのように業務に生かしているのか教えていただきたく思います。

杉本 ビジネスパーソンを対象にした勉強会など、東京ならではのイベントを、対面に加えてオンラインで配信できるように、新たなシステムを導入しました。これにより、高質な音声で複数の映像を出力し、配信することができるようになりました。また、東京センター内に個室型のソロワークブースを導入し、就職活動に励む学生や卒業生にコワーキングスペースとして利用してもらっています。

木村 コロナ禍を機に、本学では村尾信尚教授を中心に、日本の若者たちを激励したいという機運が高まりました。村尾教授は以前から日本を考えることをテーマに生涯学習講座を続けていましたから、その思いを次の時代を作っていく若者に伝えたいという気持ちが強かったのです。そこで、高校生を対象とした「村尾塾」を立ち上げ、全国の高校を回り、少子高齢化問題や巨額の財政赤字問題、環境問題などについて対面で講演を行いました。これまでに延べ5千名ほどの高校生に村尾教授の思いを伝えていきます。

また、本学は国連との連携協力により各種プログラムを

展開していますので、国連の関連機関が集まっている東京の立地を生かして、国際機関に入るための登竜門となるJPO試験のサポートも開始しました。本学教員による試験対策講座を立ち上げ、国連諸機関の駐日事務所等と協力してサポートを行ったことで、JPO試験では驚異的な合格率を記録しています。こうした取り組みができるのも、東京丸の内キャンパスがあるからこそだと思います。



木村 勝氏

変わらない価値と 新たな技術の恩恵

古谷 コロナ禍は大きな転機になった一方で、変わらないものがあることにも気付かされました。先ほど、本学の創立者である平生先生の「世界に通用する紳士淑女たれ」という言葉をご紹介しましたが、関西の学生が東京に来ることには2つの大きな意味があると思っています。1つ目はやはり視野が広がるということ。関西に根差すことも大切なことなのですが、グローバルに活躍したいなら、まずは東京で仕事をしてみることも大切だと思っています。2つ目は親元を離れて一人暮らしができるということです。本当に素朴なことですが、親の有り難みを感じて感謝の気持ちが生えることは人生において大きな意味があると思います。こうした東京で得られる価値は、コロナ禍前後においても変わらないものだと改めて実感しました。現在は、会社説明会をオンラインで受けて、面接は対面で行うというハイブリッドな就職活動も可能です。学生の皆さんには、オンラインとネットワークキャンパス東京をうまく使った二刀流で、充実した就職活動を行ってもらい



古谷 銀次郎氏

たいと思っています。

鈴木 本学は限られた人員だからこそ、積極的に新たな技術を取り入れます。昨今の学生は、GoogleやAmazonなどのレコメンド機能が個々のニーズに合わせたコンテンツを提供することにより、パーソナライズされた情報にしか関心が向かない傾向にあります。そのような状況に対応するための一つが、最近話題になっている

「ChatGPT」の活用です。対話形式でAIが質問に答えしてくれるサービスなのですが、広報や学生支援の文章を作成する際に大きな助けになっています。東京オフィスでは、「MOTTOSEI（モットセイ）」というオットセイを模したキャラクターを使って広報をしており、モットセイに「真実」・「実用」・「忠実」という本学の校訓である「三実」を重んじるペルソナ（人格）を設定して文章を作成させます。例えば、悩みを抱える学生へのアドバイスの文章を作成する場合でも少しの手直しで済む質のものを作ってくれます。教学理念と学生の事情を踏まえた文章を書くことはかなりの労力を要するため対応が困難でしたが、最新の技術のおかげで個々に向けて丁寧なフォローができるようになりました。

その一方で対面の支援を重視しています。最近も不安を抱えた学生が来室したときには、涙を拭くティッシュを渡し、背中をさすり、「大丈夫だよ」と励ましました。新たな技術と変わらない対面でのふれあいの両方で、不安に寄り添う。一緒に悩む。喜びを共有する。その積み重ねが、愛校心や愛郷心に結び付き大きな力になると考えています。

若手卒業生を取り込むための 取り組みが大きな課題

江津 東京に拠点を置くことの意義として、就職活動支援以外にも、同窓会で卒業生の交流を促進したり、公開講座を開催して外部に発信したりすることが挙げられます。そうした取り組みについて最近の事例があれば教えてください。

鈴木 本学には温山会という同窓会があり、それとは別に東京の若手卒業生が集うMTO（松山大学東京オフィス）会という組織があります。今年で創立100周年を迎えることもあり、つながりが希薄になっていた卒業生に声を掛け、もう一度つながり直そうという動きが活発になっています。それを受けて、30歳代の若手卒業生が中心となり、温山会の青年部を松山と東京で立ち上げました。非常に熱心に活動しており、SNSによる発信や就職支援を目的とした座談会の開催などに取り組んでいます。彼らは学生と社会人の気持ちの両方を踏まえ、東京オフィスの良きアドバイザーになってくれており、卒業生との交流の質と東京での就職活動支援の質は連動していると実感しています。



ているのも事実です。唯一、若手向けに開催しているのが、東京で就職した新卒生のウェルカムパーティーで、毎年80名ほどの参加者があるのですが、そのつながりが後に続かないという課題があります。

そうした課題を解決したいと考え、2022年度はネットワークキャンパス東京の主導で新しいイベントを企画しました。それが若手卒業生向けの教養セミナーです。新卒の社員にとって大切なことである、給与明細の見方、社会保険・税金の基礎知識、資産形成について学ぶ内容となっています。参加者からは継続的に開催してほしいという声もいただいております。

対外的な取り組みとしては、今年度からハイブリッドで学会や研究会を開催しています。本学の教員が理事長を務めている団体から、シンポジウムを東京で開催し、オンラインでも配信したいという相談を受け、準備を進めたのですが、結果的に会場に20名、オンラインで全国から180名の先生方が参加されて非常に充実した研究会を開催することができました。遠方の大学の場合、オンラインであれば交通費や移動時間を気にせず参加できるためハードルが下がり、研究会が活性化されるとい

古谷 本学の同窓会は非常に歴史が長く、活動も活発ですが、課題もあります。歴史が長いだけに高齢化が進んでおり、若手の卒業生のネットワークがうまく構築できていないのです。東京で就職した卒業生は、多忙で転勤もあるため、物理的に集まるのが難しいという面もありますが、若手向けの同窓会の企画がどうしても少なくなってしまう

うメリットもあります。この取り組みが話題となったように、他の先生方から問い合わせをいただくなど良い循環が生まれています。公開講座も以前はネットワークキャンパス東京の講義室で対面のみで開催していましたが、2022年度からハイブリッドで開催するようになりました。神戸のお菓子メーカーの方と経営学部のマーケティングの教授を招いて東京で開催したのですが、包括連携協定を結んでいる神戸市に協力を仰ぎ、神戸市の全ての図書館にチラシを置いてもらうことができました。その結果、神戸市民はもちろん、海外の方々にもオンラインで参加してもらうことができました。

卒業生が後輩を支える サイクルが生まれる

木村 東京では、誰でも参加できる無料の公開講座とは別に、有料の生涯学習講座「丸の内講座」を開講しています。丸の内講座は、以前の東京オフィスの住所が丸の内一丁目一番地であったことが名前の由来で商標登録もしています。当講座では、村尾教授の講義のほか、ビジネスパーソン

向けの講義を開講しています。

また、同窓生向けに三日月塾という講座も設けています。古谷さんのお話にもあったように、本学の同窓会も高齢化していたため、若手を呼び込むために創設されました。2000年の頃、当時の東京支部長が同窓であるオリックス株式会社の宮内義彦会長に相談したところ、宮内氏自身が講演を行うだけでなく、10人の経営者を招いて強いリーダーとなる人物を育成しようという話になったそうです。本学のスクールモットーは、“Mastery for Service”、まさにリーダーを目指せというものなので、コンセプトは非常に合致していました。そうして2002年にスタートしたのが三日月塾で、これまで20年以上にわたり開講しています。

毎期約30名の参加者がいますが、過去の参加者の中には経営者や役員になっている人も多数おり、彼らの間で気軽に連絡を取り合う関係も構築されています。大阪でも開講しているのですが、講師の方々には手弁当で協力していただいています。そうすると、先輩から薫陶を受けた塾生たちの中に先輩から受けた恩を後輩に返したいという思いが芽生え、今度は新しく新月塾という講座が立ち上がります。三

日月塾は30歳から45歳ぐらいまでを対象としていますが、新月塾は卒業後10年目ぐらいまでの若手が対象となっています。他にも、女性だけが参加する勉強会が立ち上がるなど、同窓を対象とした活動も活発に行われています。勉強会に参加した方が、積極的に学生の卒業生訪問を引き受けるなど、後輩を支えるサイクルも生まれています。

杉本 本学には、東京センターを事務局とした関西大学東京経済人倶楽部という団体があります。企業経営者や役員、管理職の方々と構成されている職域団体で約200名の会員が所属しています。年1回の総会と年5回程度の勉強会をはじめ、さまざまな交流の場を提供しています。そういう場があると化学反応が起きることもあり、ビジネスにつながったという話も耳にしています。

東京センターとしても会員の獲得や若手の卒業生との接点の強化が課題となっており、さまざまなイベントも実施しています。毎年、開催しているのが、新社会人歓迎のためのたこ焼きパーティーです。東京に出てきて不安を抱えている社会人1年目の卒業生のために開催しているのですが、毎回30名ほどが参加しています。先にお話した卒業生と就職活動を行う学生との交流会やこのようなイベントに





江津 英昭氏

は、東京経済人倶楽部が後援となり、後輩に対して支援をいただいています。

東京からの視点を武器に 地方の活性化に取り組む

江津 これまでの取り組みについてさまざまなお話を聞か

せていただきましたが、東京拠点の今後の展望についても伺いたく思います。

杉本 首都圏から本学に入学を予定している新入生とその保護者の歓迎会を、毎年3月に開催しており、30組60名ほどが参加してくれています。今年は首都圏で活躍する卒業生の座談会から始まり、卒業生である芸能人にビデオメッセージをもらい、シンガールのハナフサマユさんに生歌を披露していただきました。こうした取り組みを通じて、東京センターの認知度を高めていきたいと思っています。実際、東京センターがあることを知らない学生も多いため、もっと活用を促したいという思いがあるのです。

また、私が東京に来てから3年を経て実感しているのは、大阪は規模の大きい街ですが、やはりローカルだということ。スタートアップの85%は東京発だという事実もそれを物語っています。ですから、イベントなどを通して本学の学生が東京に来る機会を作り、さまざまな刺激を受け、視野を広げてもらいたいと考えています。

木村 本学としては、東京で接点を持って、講座などを通して再び本学に還元してもらうというフレームを引き続き作っていきたいと考えています。首都圏に暮らす卒業生

同士の関係、さらに学院を取り巻くステークホルダーとの関係をもっと広げていけば、そうしたフレームを今以上に膨れ上がらせる可能性を秘めていると思います。現在はそれらを一気に巻き込んで攻めの姿勢で展開していくタイミングに来ていると思います。

古谷 皆さんがおっしゃっているように、やはりネットワークを広げることが東京の拠点に課せられた大きな役割だと思っています。先ほどお話しした公開講座に関しても、全国からオンラインで参加できるということが話題となり、多くのメディアから取材を受けました。今後も東京からネットワークをさらに広げてさまざまな発信をしていきたいと考えています。

鈴木 松山では東京の新鮮な情報を得る機会が少ないのが現状です。しかし、現在、東京で活躍する若手の卒業生が積極的に交流を行っています。彼らと松山で活躍する卒業生とが協働することができれば、大きな地域貢献ができる可能性があると考えています。東京に拠点を持つ意義は、地元の大学を俯瞰しながら、新たな挑戦に取り組み、新たなつながりを作ることにあると思っています。自由な軽やかにいろいろな人や組織とつながって、それを備



値として大学に還元する。そうした循環を作っていくことが大切だと思います。

江津 本日は皆さんから貴重なお話を伺うことができ、本当に価値のある座談会になったと思います。これから東京の拠点を積極的に運営して、各大学の特色を生かしながらプレゼンスを示していただければと思います。本日はありがとうございました。

